

宮川博司 提出 学位申請論文（課程博士）

『縄文時代における骨角器の利用と社会的意義』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、縄文時代における骨角器について、その利用と社会的意義について議論するものである。序章、第1章から第3章そして終章で構成される。

序章骨角器研究の考古学的意義では、研究の目的と骨角器全般を概観する。骨角器は種類や出土量からみても先史時代における主要な道具であり、石器と並んで重要な役割を荷擔っていたことを確認する。ただその材料が有機質であることから、長年月土中に包含され腐食して形骸をとどめることなく、大部分消滅しており、遺存するものが極く一部にすぎない事情が、結果的に軽視されがちであった弊害を指摘する。本論は、改めてそうした経緯を克服して、骨角器の道具としての普遍性と特殊性を明らかにし、その社会的意義を検討する。

そもそも骨角器は、材料としての動物の骨などの形態やサイズに制約された枠組みの中でしか作成し得ないという不利さがある。しかし、一方で骨角器には石器には見られない独特な性質、つまり柔軟性および粘性を備えており、その特色をうまく利用した道具であることに注目する。釣針や銚頭などは材質の特徴を活用した典型である。

道具は生業活動と密接に関係することは論を俟たないが、本論では骨角製の漁撈具に焦点をあてている。

第1章骨角器の研究学史では、我が国におけるこれまでの研究をまず概観する。そして特に骨角製漁撈具に焦点をあてる。本論に立ち入る前提としての問題点を明らかにし、用語の混同を避けるべきであり、技術形態学的な側面からの器種名称統一や再分類の必要を唱える。第2章先史時代における道具としての骨角器の発達と地域性では、労働用具としての骨角器の機能的な特性を抽出し、用途を仮定して四分類に大別し、さらにその下位に22類を区別する。

四大別を形態のみに捉われず、漁撈具としては内湾性漁撈具（内湾性の漁撈活動を顕著に示す遺物）と外洋性漁撈具（外洋性の漁撈活動を顕著に示す遺物）、および漁撈活動以外の機能を持つものとしての狩猟具ならびに加工具と刺突具に仕分ける。

内湾性の一つはヤス状刺突具である。細長く、直状で、逆刺をもたず、シカの中手・中足骨、鹿角、イノシシの腓骨製が目立つ。鳥浜貝塚からは柄に装着された例があり、スズキなどの主鰓蓋骨に刺突痕の見られるものがある。しかし、しばしば漁撈具以外に使用したと考えられる報告例があると指摘する。二つはエイ尾棘製刺突具で、軽量、小形であるため鏃の機能も考えられる。出土の大半が破損品である。

外洋性には6種がある。逆刺付刺突具、有尾式刺突具、組合せ式刺突具、銛頭、釣針、組合せ釣針である。

狩猟具と仮定するのは、骨鏃、根バサミ、牙鏃、弭形角製品の4種である。加工具としては、ヘラ状骨製品、錐、磨製刃器、貝刃の4種である。そして刺突具には腓骨製刺突具、尺骨製刺突具、大型・細型針の4種がある。

これら各種骨角器について、とくに素材との関係を検討し、その選択性の問題を考察する。まず労働用具としての骨角器の分布の地理的様相を具体的な出土遺跡例に基づいて明らかにしようとする。つまり東京湾区、古鬼怒湾、太平洋区に大別し、さらに水系区分毎詳細にみてゆく。単なる出土点数ではなく、各器種の組成比に着目する。こうして、東京湾区では総じて内湾性漁撈具と狩猟具が半数を占めていることを明らかにする。もっとも、東京湾西岸のように例外的に大森貝塚のように内湾性よりも外湾性漁撈の方にやや傾向を示すところもみられる。

古鬼怒湾では、内湾性を主体とすることは、遺跡の立地や魚類遺体などから予想されるが、同様のことは内湾性漁撈関係の器種が多量に出土していることから、裏付けることができる。

太平洋区は、漁撈具のほか、他地区に比べて加工具類が目立つ点に特色がみられる。

さらに漁撈用具としての骨角器の時期的変遷について概観する。

第3章道具としての骨角器について、とくに素材としての選択性を時期的、地域的な視点から検討する。まず、遺跡の立地と内湾性と外洋性漁撈具、ついで骨角器の種類と構成比を出土魚種との相関関係を議論する。つまり、縄文人が漁撈活動を行うに際して、その遺跡の立地を前提として水域の特徴を熟知しながら、骨角製生産用具を選択的に作製していたことを明らかにする。

骨角器の素材の選択について古鬼怒湾や愛知県渥美半島に多くみられるヤス状刺突具を中心に考察を行なっている。東京湾岸では鹿角製、

古鬼怒湾や渥美半島ではシカの中手・中足骨を用いるという地域的性を明らかにする。さらにヤスの遺存状態が前者では完形が殆どみられないのに対して後者は目立つという興味深い差異を指摘する。例えば前述の千葉県三輪野山貝塚では、ぎりぎりまで使いこんでから廃棄しているなどの特徴に注目する。

骨角器の素材としては、実は鹿角が最良であり、単純なシカ中手・中足骨などでは逆刺の作り出しなどが困難である。しかし、貝塚、遺跡の多い東京湾岸ではそれだけシカ中手・中足骨や鹿角の入手は困難な状況を示しており、狩猟圧との影響を推定する。さらにハマグリなど二枚貝を素材とし、その縁辺部に刃部をつくる貝刃に焦点をあて、21種類を確認し、時期毎、地域毎の選択性などを明らかにする。なかでも貝刃の使用痕や欠損の分析を通して、これまでスクレイパー類のような「搔く」作業に用いられたと考えられてきたが、むしろ腹縁部の后背縁側を作業面とし、それを「平行方向」に動かし、何かを切る利器としての機能が主体的であったと指摘する。

貝刃の素材としては、ハマグリが注目されてきたが、実はオオノガイもまた重要な存在であったことを明らかにしている。つまり、ハマグリ製の刃部形態や刃部角に差異が認められ、薄い刃部を利用した剥片石器的用途が確定されるとする。

骨角器に対する追求は、とくに千葉県三輪野山貝塚を対象にさらに検討される。論者自らが調査から整理まで主体的に担当した成果である。詳細な層位別に分離、5mm、2.5mm、1mmメッシュに分けて水洗選別を実施し、微細な遺物の回収を基に、貝類、哺乳類、爬虫類、

鳥類、魚骨等を抽出し、分類、同定を行っている。その分析によって三輪野山貝塚における漁撈活動、生業の復元を試み、さらに骨角器の材料としてのシカ中手骨・中足骨・鹿角、イノシシの下顎犬歯などを検討している。

総じて海産資源が豊富で人口密度の高い地域にも関わらず石器・骨角器の確保は充分ではなく、その間の事情を克服する循環型のエコシステムを構築していた様子が読みとることができるとする。

論文審査の結果の要旨

骨、牙、角、貝などを材料とする道具類を骨角器と総称する。旧石器時代以来、石器や木器と並んで、大いに利用されてきた。しかし石器の影に隠れて、地味な存在であったのは数が少なく種類が限られているからである。骨角器の材料が有機質であるため、土中では長年月の遺存に耐えることができず、遺存を保障する良好な条件が必要なのである。軽うじて条件の適うのは低湿地遺跡、洞窟遺跡であり、とくに貝塚である。縄文時代の生業は狩猟、採集そして漁撈であり、海産資源の活発な利用は日本列島（縄文列島）に約2400ヶ所の貝塚を残しており、世界的にも注目される。

貝塚はまさに海産資源の利用の内容を如実に示す情報を良く内包するものであるが、依然として貝塚を対象とする研究者は極く少数にとどまっている。論者はそうした現況において、果敢に取り組むものである。

これまでの研究には、二つの方向性があった。貝塚に遺された食料残滓としての魚貝類をはじめ獣骨類などの種類を同定し、食糧事情を解明すること、および貝塚以外では遺存しにくい骨角器の種類とその型式分類や消長の解明の研究である。当然この二つの問題は、相互に密接に関係するものであるが、研究の実際は二分野に専門化してきたのである。本論がまず第一に評価されるのは、漁撈活動の全体を総合的に捉えることを目指すことにあり、骨角器などの漁撈具と海産資源、とくに魚類の種類さらに貝塚の立地との関係を具体的に明らかに使用とするのである。この研究こそ重要であることは充分承知されながらも、なかなか実際に取り組みられてこなかった。それだけ個別研究に比べて、総合的な検討には高い次元の視点が必要とされるからである。

いかなる目的であろうと、考古学的なアプローチの基本は型式分類である。それによって、個々の骨角器は道具としての明瞭な存在となり、地域性や時代性の中に正しく位置づけられる。それ故、本論の出発としての意味をもつのである。分類の方針は、骨角器の道具としての機能的な特性から用途を仮定して四大別するところに特色がある。従来の研究は、むしろ形態の分析を第一とするところにあり、その点に独創性がある。形態上の問題は、下位の22種に区別するところにおかれるのである。このことは、たしかに骨角器を外見だけで区別するのではなく、用途の違いに着目しようとするのであるから、一步踏み込んだ意味がある。けれども用途は、形態の具体性とは、区別されるべき高次の次元の問題である。形態が直ちに機能を意味するのではな

く、形態は機能・用途の可能性を示唆するにとどまることを承知せねばならない。換言すれば形態から一足とびに用途と結びつかないところが悩ましいのである。骨角器の社会的、文化的、経済的意味は形態にではなく、機能にこそあるのではあるが、迂遠ではあるが、まず形態分類の次元における作業を固めてから、機能・用途に進む地道な作業過程を疎かにしてはならないのである。いふなれば、土台をしっかりと構築することによって、より高次の問題を徐々に絞り込む段取りが約束されるのである。

つまり、論者が外洋性漁撈具としての釣針や銛などの分布および内湾性漁撈具としてのヤス状刺突具の分布が相互に排他的な存在であると指摘するが、なかにはイレギュラーな種類が混じっている実態を捉えながらも、類型別組成という大別の視点からみれば、矛盾は解消されるとする。しかし、そうした観方はやや大雑把な感を免れないであろう。極言すれば、そこに静的に見過ぎている恐れがあり、たとえば、外湾、内湾の条件にとらわれない漁撈活動の多様なあり方にもっと注視する必要があるのではないか。舟を操る漁撈活動という観点でみることによって、より活発な行動が予想されよう。その点を吟味した上での大局的な観方がさらなる展開を期待されるのではないかと考える。

そうしたところは、改めて吟味する必要性が残されてはいるが、本論の目指す、漁撈具の内湾性と外湾性の視点から、骨角器を見極めようとする点は重要であり、新しい研究の地平を拓くものである。

もう一つの主題は、各種骨角器の素材とのかかわりの議論にある。

立地との関係性を視野に入れ、主要な素材としてのシカの生態学的なあり方と、鹿角などの獲得戦略から狩猟圧の問題に接近するなど具体的事実のみにとどまらず、大局的な観方を垣間みせており、今後の研究における大きな構想への展開を期待させてくれる。

しかしながら、いくつかの問題が指摘されねばならない。一つは釣針やヤスや銚などの各種の漁撈具は、それぞれに固有の機能と用途を有するものであることは紛れもない事実である。けれども、釣針はその一つを以って、魚を釣り上げることは出来ないのである。つまり水面まで手繰りよせても、大魚であればあるほどに暴れ回って容易に手元まで持ち上げることは出来ない。そのとき、もう一つの漁具ヤスで一刺しして仕止めるのである。漁具の一つは、それだけで機能を完するのは困難であり、自己完結し得ない実際をみる必要がある。その複雑なあり様に対する考慮がさらなる深い理解へと導いてくれるはずである。

また、縄文文化の漁具は、古今東西の漁具のあり様全体と比較しようとする試みは認められるが、主体性を明らかにすることが出来るが、依然として不十分である。単なる形態のみにとどまらずその材料との関係などから、縄文の多様性を具体的に把握する必要があり、それによって縄文の漁撈具の特性と主体性を世界史あるいは人類史の漁撈文化の中に正当な位置づけが可能となろう。

以上、縄文文化の漁撈について、骨角器から果敢に取り組み、今後の発展を期待させる成果を有するものであり、本論文提出者の宮川博司は博士（歴史学）の学位を授与される資格を有するものと認められ

る。

平成23年2月18日

主査 國學院大學大学院客員教授 小林 達 雄 ⑩

副査 國 學 院 大 學 准 教 授 谷 口 康 浩 ⑩

副査 國學院大學大学院客員教授 西 本 豊 弘 ⑩